

## 「吉川勇一・武藤一羊 80+80=160 歳の集まり」での吉川の話 基地調査活動のレポート紛失と「人民の海」

武藤さんの新著の書名は『潜在的核保有と戦後国家——フクシマ地点からの総括』と、とても具体的なタイトルがついています。一方、私の原稿の載っている本の書名は、『一九六〇年代 未来へつづく思想』と抽象的なタイトルがついています。しかし、中身はまったく逆です。私の原稿はまったく具体的な話ばかりです。私はそういう人間で、抽象化がとても苦手なのです。何かを表現したいと思ったら、具体的な事実の例をいくつも並べ、そういうようなことからわかると思うことを言いたいのだ、とするしかないのです。ところが、武藤さんは、政治の話でも運動の話でも、あるいは生きた人間のことにしても、実に抽象化が見事で、そういう言い方それしかないなというような確かな表現が出来る人です。ですから、私が具体的な例をいくつも並べて言うと、彼はイライラしてきます。そんな話をダラダラ言わなくても、要するにこういうことだろ、と一言でまとめて表現してしまいます。そして吉川はくどいよ、と言います。

今日配られたメッセージ集の中に、福富さんの話で、私と武藤さんとのあいだで、掴み合うまでの論争、というより、喧嘩のようになる話がありますが、実際、二人のあいだでこういうことから怒鳴りになることが毎回でした。最近2~3年は、歳のせいかな、それはどうやら、なくなっているようすけれどね。

お配りした私の年表には、武藤さんとの関係が18歳のところからたびたび出てきます。今日は、武藤さんとの関係の中から、武藤さんと関連する話をひとつ紹介したいと思っていますが、これもえらく具体的な話です。ベ平連の詳しい年表にもまったく出てこないエピソードなのです。

1972年6月のことです。6月24日(土)に私は沖縄に出かけます。私は、それまで沖縄に行ったことがありません。というより、行けませんで

した。私は反米人間だということで、パスポートがもらえなかったからです。沖縄が日本に施政権を渡され、沖縄県になったので、初めて私は行かれるようになったのです。

私が行ったのは何のためだったか、それが武藤さんとの関係があるのです。

年表の中にも入っていますが、1969年に、自衛隊佐渡基地にいた小西誠三曹が、基地内で「アンチ安保」という反安保のビラを撒くことから、逮捕され、新潟地裁で裁判が行なわれていました。ベ平連も、この小西さんの行動を全面的に支援し、裁判闘争に関わり、私もほとんど毎月の裁判に新潟に通っていました。

その中で、1971年から、ベ平連、小西さん、各新左翼党派も含め、基地調査闘争という行動が開始されました。活動団体が、各自衛隊基地についての具体的な活動調査が進めたのです。1年以上かかりましたが、基地調査のレポートが東京に集まってきました。

そのファイルをまず見せてほしいということで、ベ平連の小西裁判支援委員会がそれを預けて借出しました。武藤さんは、まずそれを見たいと、ファイルを入れた風呂敷の包み持って帰ったのですが、その途中、たしか鶴見良行さんも一緒だったかとも思うのですが、バーだったか飲み屋かで一杯のみ、そのあと、武藤さんはタクシーで帰宅しました。ところが、なんと、酔っていたせいか、そのタクシーの中に、包みを忘れて置いてしまったのです。いろいろ調べても、どこのタクシーだったかもわからず、見つけることが出来ませんでした。

私たちは顔を青くしました。すでに、中核派や革マル派などのあいだでは、激しい内ゲバは始まっており、ベ平連と中核派とのあいだにもかなり危ない関係になっていました。小西さんも、初期

はベ平連とうまく活動していたのですが、この頃は中核派に急速に接近しており、「革マル派の粉砕を言わないようなベ平連は、自分の裁判闘争を支持する権利はない」などというようなことまで口に出すようになっていたのです。

そういう状況の中で、中核派の活動による基地調査レポートもかなり多く含めた資料を、タクシーの中で無くしてしまった、ということになると、彼らからベ平連への抗議闘争や糾弾闘争はかなり激しいことになり、ベ平連はえらく困った地位におかれることになるのは確実でした。

ベ平連の中心メンバーはいろいろ相談はしたのですが、いい手はなく、しかし、まずは、早いうちに、小西さんにこの経過を報告だけでもしておかなければならないということになり、その小西さんとの交渉を吉川がやれ、という話になってきました。

小西さんの近況を調べて沖縄で講演会を続けているとわかり、小西さんと会うためには、吉川は沖縄に行かねばなるまい、ということになります。これが、私の初めての沖縄行きになってきたのです。嫌な仕事でした。

沖縄での小西さんのスケジュールですと、6月24日(土)には、午後は沖縄大学で講演会をやるということがわかりましたので、私は沖縄について、すぐ沖縄大の集会に出かけました。開催の前に教室に入り、後ろのほうの席に腰を下ろして、講演の始まるのを待っていました。

と、開催の前に、坐っている私の肩が叩かれました。「おじさん！ あんた、どこの人間？ 警察だな？」というわけです。確かに、集まっている学生たちよりは、私は年が大分上でした。私はベ平連の事務局長の名刺を出して説明したのですが、沖縄の中では、ベ平連のことはあまり有名ではなく、私を取り囲んだ自治会の活動家（まずは中核派だったでしょう）が、ベ平連なんてなんだ？というわけです。小西さんの関係など、いろいろ説明はしたのですが、なんとしても納得されません。

私は周りを取り囲まれ、まず、地下の自治会室まで行け、と言われます。両腕を掴まれ、背中を押されたりして、私は教室から出され、階段の下へ下ろされてゆくことになりました。

これはえらくまずいことになったな、最終的にはわかるだろうが、まずは何度か、殴られることぐらいはやられるだろうな、と覚悟しました。ひどければ、骨折ぐらいやられるかな、そうも思いました。武藤のおかげで、私は何でこんな目に会うのか、とも思いましたね。

困ったなと思いつつ、囲んで階段を下りているときに、なんと、ありがたいことに、三里塚闘争の反対農民同盟の戸村一作委員長が上がってくるのとパツパツ出合ったのです。戸村さんはもちろん、私をよく知っています。「あら、吉川さん、なんでこんなところに来ているの？」というわけです。囲んでいた中核派の自治会活動家たちは、「なんだ、戸村さんが知ってるのか、警察スパイじゃないのか」ということになりました。ホッとしましたね。「地獄で仏」とはまさにこの状況でした。

小西さんへのファイル喪失の報告も出来ました。もちろん、彼は納得せず、東京へ戻ったあと、徹底的に検討するが……ということでした。

私はその翌日、早々に東京へ戻りました。

それにしても、なくした基地調査闘争のレポートファイルの包み問題を、どう処理するかは、いい手などあるはずがありません。以後、小西さんや中核派などから、ベ平連は徹底的に、抗議、糾弾されるだろうな、と覚悟せざるを得ませんでした。

ところがです！ ここから、「人民の海」の話になります。

沖縄に帰ってから間もなく、ベ平連の事務所に電話が入りました。たしか目黒だったかと思いますが、ある飲み屋のマダムさんからの電話でした。軍事基地と関係あるような文書の風呂敷包みがあるんだが、どうしたらいいか、ベ平連からでも相

談してみたらわかるかな、と思ったんだけど、  
いうのです。

「えッ！ どこにあったんですか？」「いや、うちの店によく寄るタクシーの運転手さんが、こんな変な包みをお客が忘れてったんだが、これ、何だね？ 警察に出した方がいいかね？ というんです。見せてみて、と眺めてみたんですが、どうも、警察には出さないほうがよさそうなものだなとピンと思い、誰に相談してみたらいいか、と首をひねった上、ベ平連とかいうところなら判るかな、と思ってきたんです。で、運転手からは、預けておいてってくれ、と言い、この電話をかけたんですよ」というのです。

このマダムは、ベ平連とはそれまで、まったく連絡はなく、なんとなく、そこなら相談に乗れそうかなと思ったというだけなんだそうです。

驚き、大喜びになりましたね。たしか鶴見良行さんも一緒に、その場からタクシーに乗って、その飲み屋へ飛んで行きました。包みは、無事に全部手に入ったのです。本当に助かりました。その時の嬉しさは、決して忘れられません。

こんな話が、実際の出来事としてあったのですね。「人民の海」という言葉が当時ありましたが、まさにこれはその事実でした。

1970年代の初め頃とは、まさにこういうことが起こる、そういう時代だったのですね。

以上が、私と武藤さんとのいろいろある関係のうちの、一つの具体的なエピソードの一つでした。以上です。